



『トクシマ・アンツアイガー』

第6号

徳島 1915年5月9日

東部戦線での出来事（1）

この間、ドイツから来た新聞に東部戦線での出来事に関する解説が載った。ひどく異なった情報源を持ちいくつもの矛盾を含む短い報告をもとにしては、おそらくこの地で実際にわれわれの国境で起こったことの解明はほとんどできないので、今回は本国からの情報をもとに簡単な展望をしておきたい。

東プロイセンに侵入してきたロシア軍をタンネンベルクとレーツェン¹の大戦闘で打ち負かしているうちに、オーストリア軍がヴァイクセル川²北方のポーランドで行動を起こし、そこでロシアに大変な勝利を納めその攻撃

1 ロシア名ルツク (Lyck)、1914年8月のタンネンベルクに続いて、9月にドイツ軍はここでの会戦で勝利した。

2 ポーランド名ヴィスワ川

によって敵の主力を自分の側に引きつけた。勝利した同盟国の軍隊は、その後9月末により有利な陣地で新たな戦闘を展開するロシア軍の圧倒的な優位に押し戻され、ロシア軍の大多数はいつそうよい陣地などを回復することができた。

こうしたオーストリア軍の撤退を助けるため、わが軍はワルシャワ南方のヴァイクセル川の方角に攻勢をかけ、目的であるできるだけ多くの敵の軍勢をオーストリア軍から引き離すことに成功した。10月になると、イヴァンゴロド周辺のヴァイクセル川沿いのロシア軍とわが軍の戦闘が激しくなった。負担の減ったオーストリア軍は、サン川を越えてガリチアに侵入してきたロシア軍を押し返しプルツェミスル要塞を解放した。

ロシア軍はガリチアからの軍隊のほかに、国内からもさらに大量の新たな兵力をこの戦場に送り込み、ワルシャワの北方を前進してドイツ軍陣地の左翼を押し破ろうと脅かした。ドイツの側ではロシア軍の攻撃を、ワルシャワへと大胆に進撃することで阻止できると信じていた。ヴァイクセル川を越えたロシア軍を押し戻すことにも成功し、われわれの勇敢な部隊は10月の末にワルシャワの門前に達した。ロシアはわれわれに何倍もの優位で立ち向おうと、こことさらに北にそうした軍勢を集結させた。

つづく

日本の歴史（5）

女帝斎明天皇の死後、これまで皇位継承者だった中大兄皇子が天智天皇の名で統治するようになるが、この人はそれまでもすでに政務にかなり大きな影響を持っていた（662 - 672年^{3）}。主としてこの人が手がけた内政改革は、さらに継続され推し進められることになった。彼の功績は、日本を一種の好戦的な半端な文化から文明のかなり高い段階に高めたことにあ

3 正しくは671年

る。彼の支配は長くなかった。年数は短いが大きな成果を生んだ貴重な生涯は、10年後にはもう終わりを告げた。改革の大部分を宰相鎌足が担った。彼は天智天皇から特別に重用されていた。彼には藤原という新しい氏の名が与えられ、死後には一つの寺が建てられた。

鎌足は、くり返し皇室と婚姻することで力を蓄えやがては皇室を後見するようになる藤原氏の創立者であり、この一族は日本の歴史でずばぬけた役割を果たすことになる。

天智天皇の後継者には、慎重さと広い見識の優れた弟の天武になった(673 - 686 年)。彼の人々を幸せにする統治は天智が切り開き指導した進歩を推し進め、それを数々の布告でいっそう広い分野に広げることができた。天武の妻で夫の後を継いだ持統(687 - 697 年)の統治は、同様に未来につながる路線で進められた。若い文武帝(696 - 707 年)の下で大化の改新は一応の終結を遂げた。彼の義父である宰相藤原不比等は、初めて日本全体の律令をまとめた。それまではまだ成文化されていない慣習法が力を持っていた。不比等の事業は、法典として法律を制定する最初の貴重な一歩となった⁴(701 年)。不比等の法令集はその後数世紀、さらに一部はそれを越えて諸関係の重要な基礎となった。この法令集はいくつか時代状況の進歩に適応しない点の変更はあったが、天皇権力が「明治になって」近代的に再興されるまで効力を持ち続け、公的生活と私的生活のほとんどの分野を規定している。立法は中国の模範に対応するように2つの主要な部分、つまり刑罰を扱う「律」と「令」という政令からなっている。「律」とは後の世紀と較べるとかなり穏やかな刑罰集で、鞭打ち・追放・死がその内容であり、「令」とは実際の国家の基本法を官庁・文化・学問制度の完璧な規程とともに述べたものである。これらの政令は、すべてもちろんおそらく実際の状況にいくらか先行したものではあろうが、中国の模範⁵に従って法制化した諸領域からなり、当時の日本民族のかなり高い文化段階

4 大宝律令

5 永徽律令(651)

に適應するようにまとめられている。「令」は国家と宮廷の官吏全体の機構、官吏が任命され昇任する官位、さらには彼らの給与と賜暇、彼らによるみずからの臣下の補充についての報告、法律布告と官庁の文書交換の形式を詳しく述べている。それは神社と神官、仏教の僧と尼僧の関係を定めており、兵制と近衛兵を扱っている。そこには、授業方式と保健制度、罪人の訴追と拘束についての法律と監獄規程が含まれている。家族法や相続法、埋葬・喪・喪服や儀式の仕方の規程がある。そして最後に「令」は、農耕と牧畜・税・和睦・倉庫・建物・灌漑・暦・市場・度量衡についての政令を解説している。

統治者つまり中央政府の所在地は、かつての都に戻ることも珍しくはなかったが、それまではそれぞれの天皇が死ぬと次々と移動した。710年に統治者の居住地は奈良に移され、その後引き継がれたので最初の実際上の首都となった。奈良には元明天皇（707－715年）のほか、元正（715－724年）、聖武（724－749年）、光仁（770－781年）が居を構えた。「奈良の七王朝」〔孝謙（749－758年）、淳仁（758－764年）、称徳（764－770年）の3代を含む〕の時代は、まったく中国の影響下にあった。

つづく

日本人の楽しみと祭り（2）

さまざまな花祭りはどれも幅広く祝われ、「花見」の章ですでに述べたように日本人の細やかな自然感と花への愛を内面から明らかにしてくれるが、そのほかにも日本人の特性に同様に豊かな光を当ててくれる、2つの子どもの祭りにふれておかなければならない。それほど前のことではないが、女性とわけても少女が色どり豊かな帯と晴れ着を身に着けていた祭日があった。女の子の祭りつまりひな祭りである。それぞれの小さな少女はいくつかの人形を持っている。それらの人形は、（女の）友だちに見ても

らおうと部屋に飾られる。それを機会にすべての家の宝が人形のそばに持ち出され、人形のための食事が用意される。人形の下にはしばしば価値のある古い家宝が置かれたりする。

旧暦の5月5日つまり新暦の6月初めに、2番目の子どもの祭りであるのぼり（幟）祭りが祝われる。男の子のための祝日である。この祝日の名はその日に前の年に男の子が生まれたそれぞれの家で、風に乗せて紙ののぼりを流す風習によるものである。のぼりはたいてい大きな画に描かれた鯉である。鯉と同じように、男の子もあらゆる生涯を越えて前進するように努めなければならない。新年の祭りを除けばこれが日本で一番きらびやかな祭りである。その際男の子は同じく紙をもらうが、そこにはたいていは武装した戦士が描かれている。その上彼らは、武士や武具やよろいや合戦が描かれている（布の）旗をもらう。この日男の子たちは、それぞれの遊び道具で楽しむ。戦争ごっこやボール競技が催され、竜が挙げられるなどなど。男の子の祭りは女の子の祭りと同じく、修養になるのである。女の子はそこでしとやかなふるまいを学び、男の子は武士の精神に目覚めることを求められるのである。

そんなに広まっているわけではないが、あちこちの寺の地域で祝われたりさまざまな神が崇められる宗教的祭りがある。そんなことで最近狐祭り（おいなりさん）を体験した。われわれの収容所から、川向かいの花火やにぎやかな生活や行事を観察できる。狐は稲の神を象徴している。狐祭りの日に人々は稲の実りが良いように願う。もっとも大きくて有名な狐神社は京都の近くの伏見にある。そのほかにもたいていの田舎道に、狐の神様つまり稲の神をまつた小さな木の祠がある。このようなものなのでそれらは、いつも赤い鳥居とその前に置かれているいくつかの白い狐によって見分けがつく。

各地ではもっと特殊な地方ごとの祭りが行われている。例えば徳島でことに興味深いのは、7月11日から15日に催される死者の祭り（盆踊り）である。日本のほとんどすべての祭りがそうであるように、この祝いでも

街路を通り抜ける行進が行われる。踊りが演じられ、男性は派手な女性の衣装を身に着け逆に女性は男性の衣装で現れる。以前はこの祭りは身分の高い人も低い人もみんなで祝ったらしい。けれども今はこの踊りに参加するのは下層の住民だけである。

つづく

戦闘日誌（５）

- 10月15日 最後にアメリカ領事と二名の婦人が青島を退去した。
- 10月16日 第5歩兵保壘で照明弾が爆発。下士官一人死亡。野戦病院と一般兵員室が焼け落ちた。被害甚大。
- 10月17日 水雷艇S90は夜半に出撃し、魚雷を発射して日本軍の巡洋艦「高千穂」を沈めた。追撃を逃れるため自沈した。乗組員は救出された。
- 10月21日 第1・第2・第3歩兵保壘の90人が、朝5時に田家村に向かい敵襲に会う（ヘメリング少尉とキューファー一等海兵死亡）。プリューショー中尉は、着陸の際に初めてイルティス広場で榴弾砲の射撃を受けた。
- 10月22日 斥候隊が第1歩兵保壘から出発した。ビーゼナー二等海兵が浮山所で、泳いで行って敵の航路標識を取り除いた。さらに先へ進んだ所で、ディール伍長がひどい重傷を負った。彼は後に遺体で発見された。手帳には最後の言葉が記されていた。「ひどい死に方をする事になったが、皇帝のために死ねて嬉しい」。
- 10月25日 海から砲撃。第3歩兵保壘は、夜には激しい砲撃を受けた。
- 10月27日 皇帝からの2度目の電報が届いた。
- 10月28日 弧山から造船所が砲撃された。

- 10月29日 海からひどい砲撃(240発)、「トライアンフ」(イギリス艦)がまた参戦してきた。
- 10月30日 日本軍は、前線の砲台のすべてを砲撃した。夜に初めて飛行機が現れた。軍艦「ティーガー」はひどい砲撃を受け、さほど被害はなかったが2発が命中した。9月28日に捕らわれた3人の患者搬送係が釈放された。
- 10月31日 朝6時に、陸と海からの一斉砲撃が始まった。砲撃で重油タンクが炎上した。ビスマルク山、イルチス山、すべての一般に知られている保塁、ことにオーストリア軍の保塁、台東鎮、チンタオのたくさんの建物は、ひどい被害を蒙った。
- 11月1日 砲撃継続。造船所の上のクレーンが飛ばされた。「ティーガー」を自沈させた。保塁に夜間攻撃があったが、撃退された。
- 11月2日 海軍工廠は人員を塹壕に送った。夜には「カイゼリン・エリーザベト」を自沈させた。
- 11月3日 電気部門は砲撃でひどい被害を受けたので、送電を中止せざるを得なかった。チンタオから灯りが消えた。
- 11月4日 敵はひどい損害を受けている主障壁へ突撃機材を運び込んだ。夜8時から9時の間に、海泊の上水道が攻撃を受けた。第三海兵大隊第3中隊の24人が捕らえられた。

つづく

われわれの前回のコンサート

日本の陸軍省は、俘虜に今後演劇の上演を禁ずるという命令を下した。丁度舞台が完成しまだいくつかのプランの実現が待たれていただけに、この禁令はもちろんことに大きなショックを惹き起した。ただこの禁令の中に音楽公演が含まれておらず、したがってこれからもオーケストラの公演を楽しめることは、たいへんな慰さめだった。

もう音楽公演もできないとしたら、誰もがそれをきっとわれわれの収容所にとってとても大きな損失と考えることだろう。これは、オーケストラにとっては非常に彼らの自尊心をくすぐる事実である。これからはもう「拍手」できないということに、おそらくわれわれの音楽は気にする必要はない。というのも、われわれの音楽の聴き手の喝采が、大きな拍手となって発散されることが許されない場合でも、われわれの音楽はその喝采をつねに確信してよいからである。

前回のコンサートは、オーケストラがどんなに苦勞して完璧な演奏をしようとし、どんなテンポでこうした目標をめざしたかという一つの例だった。

プログラムに関してはおそらく、第一部がいくらか長すぎたという苦情があることだろう。けれども演奏は絶賛に値した。個々の作品についてはすでに前号で述べた。だからわれわれのオーケストラにきちんと、もう一度とても楽しい夜を与えてくれたことに感謝するに止めたい。ことに、「ファウストの音楽」と「ハルンの息子たち」が好ましかったことを強調したい。最後のコンサートは、ソリストよりもオーケストラに多くのことを求めた。両者はこれらの要求にきちんと対応した。だからそのバラードはまさに完璧な作品になったのだ。ミレンツォー等砲兵が優れたバリトンであることも判った。できればもっとくり返し聴きたいのだが。

公演の夕べ

ほかの箇所ですでにふれたとおり、残念ながらわれわれの新しい舞台での演劇上演は陸軍省によって禁じられた。けれどもケルナー的一幕ものの準備はほぼ完了しており、このドラマを舞台の最後のものとして上演することがもう一度許可された。こうしてわれわれのさしせまった娯楽の夕べを、「100 年前に」と名づけることができた。ホーエンフリートベルガーの音楽そしてエルンスト・モーリッツ・アルントとテオドール・ケルナーの力強い自由の歌・戦闘の歌の中で、祖国の憂鬱な日々の心へと引き戻され、韻文や散文による詩の朗読が、ケルナーのドラマ『ヨーゼフ・ハイデリッヒ』への気分を整えていた。これは、詩人のもっとも今後に期待できるドラマティックな作品の一つである。残念ながらガルデブッシュの戦闘であのリュッツォー軍団の兵士を襲った早すぎる死が、ドラマの才能をさらなる展開を止めてしまった。彼の他の作品のどれ一つも、『スリーニ』さえもがそうでないようにこの作品は『年老いた誠実なハイデリッヒ』の英雄の性格におけるドラマティックな行為と悲劇的な葛藤のすぐれた迫力と簡潔さを持たず、あっさりしていることでいっそう感動をそそる。言葉の点では、ケルナーにおいてしばしば煩わしく思えるようなシラー風の調子が（この作品には）欠けているが、彼は他のドラマではそうした調子にかなり表面的に頼っているのがふつうである。真にドイツ的な詩は内に自由のための戦いの炎の精神が生きており、そこから詩人の心に祖国愛の激情がほとばしり剣と豎琴を同様にうまくこなさせるのだ。

まさにわれわれの時代には、かつてよりも多くあの数年を振り返ることができる。その頃に、1870 年と 71 年にしたたかな一撃を食らわせ、今日もふたたび敵中に澄み切った鉄の音を鳴り響かせているあの剣が鍛えられたのだ。だがここは彼ら「昔の英雄たちの霊」自身に語らせることにしよう。

プログラム

1. ホーエンフリードベルク行進曲
2. 年老いた英雄の精神 ガロク
3. 最近のプロイセン戦争からの逸話 クライスト
4. 神が鉄を鍛える アルント
5. 竜騎兵連隊の年老いた衛兵長のバイロイトへの挨拶
 リリーエンクロン
6. 呼びかけ ケルナー
7. 剣の歌 父よ、あなたに呼びかける！ ケルナー
8. 戦い シラー
9. 「ヨーゼフ・ハイデリッヒ」 ケルナーのドラマ
 (ヴェルナーの前奏曲演奏付)
10. フィンランドの騎兵行進曲
11. 1914・15年の兵士の歌

開演 7時30分

最後の歌は後からプログラムに付け加えられた。この今回の戦争での兵士の歌を遠足のときに歌えるように、みんなが覚えてくれるとよいのだが。

チェス・コーナー

トーナメントについて

みんなが期待していたように、ようやくたくさんの人が参加したチェス競技が開かれた。おおよそ信じられないような短時間で競技は終わった。まだ 20 日も経たないうちに、予選 35 試合と決勝トーナメント 114 試合

が済むなどと考えられようか。ここでは時間があり余っていることを考えに入れても、毎日8試合という数がトーナメント参加者の関心のはっきりした目途であり続けた。そしてどんなにたくさんの観客が、この競技のもっとも大事なものを追ったことか！トーナメントが始まった第1日目にすでにはっきりしたが、この時になって初めてチェス好きの数が増えていることを理解できた。そうなのだ、あちこちでチェス競技は「上品なスカート」をしのぎ、そのさらに「より上品な」変形をしのいでいた。われわれの新たな友たちは、次のトーナメントで月桂冠を取り合おうと本当に熱心に勉強しようとしていたのである。

競技の仕方について何かを言わなければならないとしたら、次のことだけはふれておきたい。本当に明らかだったのは、どのように競技を始めるかがはっきりしていないことだった。私は競技者の一人が最初にどんな相手にぶつかるかによってすでに、順位の決定的な利益が生ずるような試合を見てきた。もちろんどう始めるかはまさに本で勉強することで学ぶしかないし、どこからもチェスの本が手に入らない場合はこのことはとてもむずかしい。にもかかわらず毎日の競技の際には、いくらか慎重にすることでかなりのことが改善される。自分の経験から提案したいのは、試合後に何か不利をもたらした手（すなわち悪手）をもう一度調べ直せるようにしょっちゅう試合を記録することである。それ以上の練習はない。競技中によく見られたのは、例えば一つのポーンを取るという小さな利益のために良い狙いの考えを捨てることである。計画を途中で変えていると、ともするとあてどなく右往左往することになり、うろうろしない相手はそれよりも有利な立場になる。終盤も理論的な研究が必要である。最近収容所でこのことについての本を見た。着手の修得がはるかに大事ではあるが、おそらくそこでも何かが片付けられなければならない。なぜなら本来の決勝戦とは言えないようなたくさんの試合があるからだ。次のトーナメントは一クラスだけで行われよう。だからまさに多くの人が、「徳島のタイトル」を争うという仕事に取りかかることになる。

われわれのトーナメントの結果は毎日の掲示で知らせた。ここでもう一度勝者の名を挙げておこう。

第1クラス

1. オファーマン
2. レンケル
3. エーベルツ

第2クラス

1. ローデ
2. ドロステ
3. ベーマー

第1クラスには、まだ最終戦の追加が必要である。4人の競技者が同点で、2位・3位を争っているからである。

前回の問題の正解者

ドーバー等砲兵、ヨーゼフ・ヴェーバー二等砲兵

第6問の解答

1. Tg4 - g5+ Kh5 x g5
2. Sd8 - f7+ Kg5 - h5
3. g2 - g4 詰み

第7問 白：Ke2, Ta5, Se3, Bf2

黒：Ke4

3手摘め

第8問 白：Kg6, De4, Ta1, h8

黒：Ka8, Ta7, b8, B, b7

2手詰め



塹壕からの感謝の手紙

敬愛する奥様！

とり急ぎお伝えしますが、
あなたから頂いたズボン下
から「鉄十字」を手に
しました。

もう一度、心から感謝を
申し上げます。

後備兵 クチュケ





合言葉！ わが勇敢な戦士に

時が叫び

鐘が鳴る

しっかり口を結んで

来たるべきものを引き受けよう

敵のあざ笑うような者は

力と骨の髄を持たなければならない

帝国よ、われわれを励まし

棺を用意してくれ

ひ弱でしおれたすべての怠け者に

立ち向かい

世界の敵を防ぐために

帝国は高みに

太陽の中に隠れている

帝国は自由のはやてに

ざわめいている

チャンスはもう来ない

だからすばやくチャンスを活かそう

君たちのドイツ人気質を持ち続け

屋敷と妻と子どもを守るのだ

君たちのために阻止するより以上に

ドイツの誇りと栄誉を揺り動かす敵を

彼らすべてに示してやろう、あらためて示してやろう

死か勝利かを！「合言葉、それは今日こそは」だ

イギリスでのスパイの恐怖

ジョン・ブルがベッドを離れるやいなや、
ナイトテーブルの傍に一人のスパイが現れ、
彼が風呂から出てくると
スパイも一緒に後からついて来た。

お茶にはサンドイッチを7枚食べたが、
その一枚一枚にスパイが坐っており、
彼が街に出かけるときも目に見えないが
スパイは一緒に出かける。

今はどの風見もスパイで一杯だ。

彼は煙突の上から鍋に何が
入っているのか覗き込む。

そのうえ奴は電車の中にも
車掌として付いてくる。

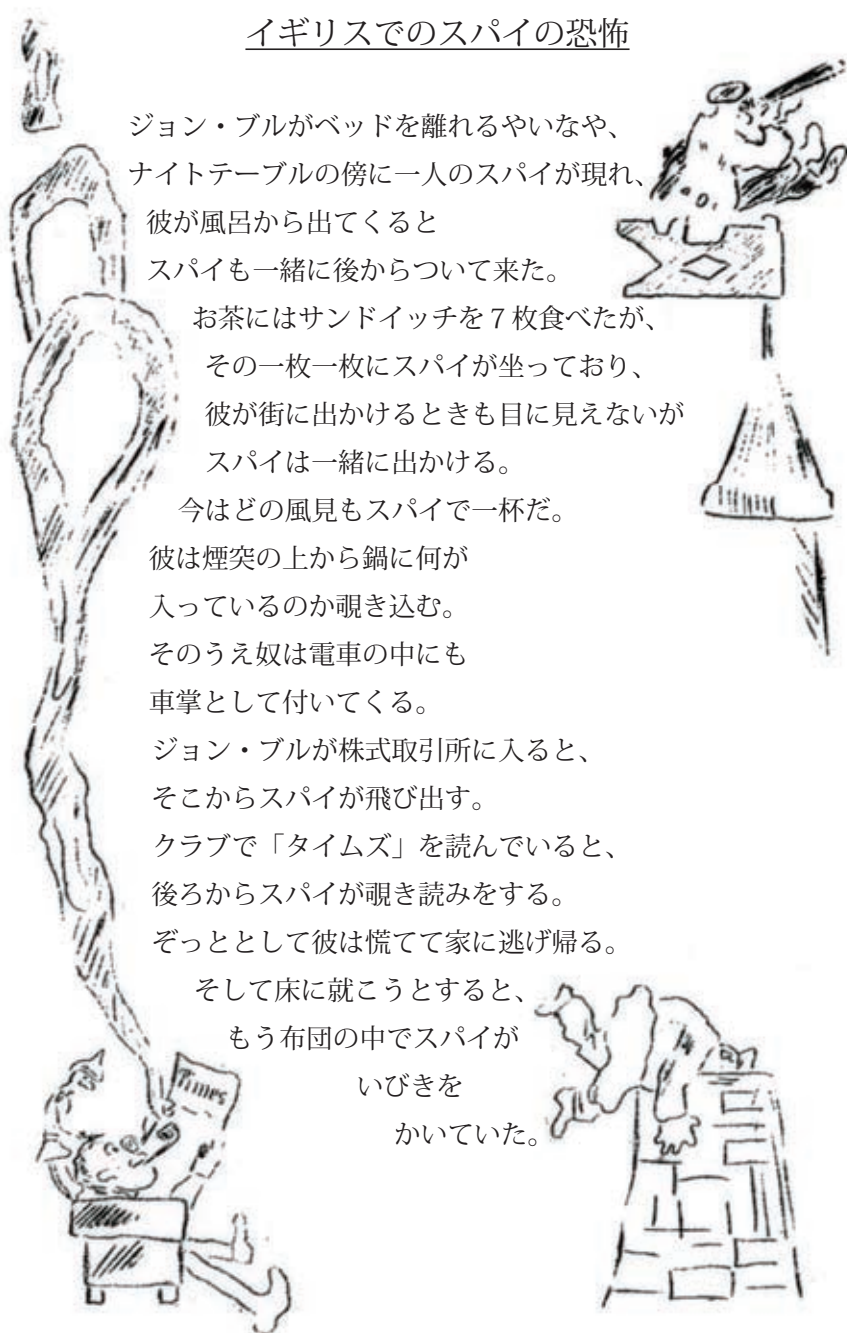
ジョン・ブルが株式取引所に入ると、
そこからスパイが飛び出す。

クラブで「タイムズ」を読んでいると、
後ろからスパイが覗き読みをする。

ぞっとして彼は慌てて家に逃げ帰る。

そして床に就こうとすると、
もう布団の中でスパイが

いびきを
かいていた。





怖くなって首を吊ろうとすると、
鉤にはもうスパイがぶら下がって
いる。

次の2番目の鉤にぶら下がり、
この世におさらばしながら、
やっと気づく。

スパイは死んだふりをしている
だけだということを。

1914年・15年の兵士の軍歌

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1) さあ曲に合わせて歩調を取れ。 | 2) 皇帝は語りこぶしを握り |
| 馬を走らせろ。 | 手足がむずがゆくなる |
| われわれはごたごたには | にぎやかながきたちは押さえ込まれ |
| うんざりしているのだから。 | あっさり押さえ込まれる。 |
| 彼らはうそと電報で | 英仏露協商に |
| 大騒ぎをしている。 | 赤い汁を塗ってやりたい |
| さあ今こそ、ユファレラ | そこで彼らはいつものように |
| 今こそ彼らを叩きつぶそう。 | そこで彼らはもう身を縮めている。 |

- 3) けれど最後の節は早く歌おう
もう砲弾がうなりをあげているから！
ずしん、連中に一発食らわせる
そして指をくわえてみているのだ！
世界中がふるえながら見物しており
そしてオーバーシューズごしにつつき合っている。
さて陛下、どう思いますか？
彼らはもう打ちのめされているのです。